

再 版

内村鑑三著

基督教信徒のなぐさめ

東京 警醒社書店

自序

心に慰めを要する苦痛あるなく、身に艱難の迫るなく、平易安逸に世を渡る人にして、神聖なる心靈上の記事を見るも、唯人物批評又は文字解剖の材料を探るにとどまるものは至少の利益をも此書より得ることなるべし。然れども信仰と人情とに於ける兄弟姉妹にして、記者と共に心靈の奥殿に於て靈なる神と交はり、悲哀に沈む人靈と同情推察の交換を爲さんとするものは、此の書より多少の利益を得る事ならんと信ず。

此書は著者の自傳にあらず、著者は苦しめる基督信徒を代表し、身を不幸の極點に置き、基督教の原理を以て自ら慰めん事を勉めたるなり。

書中引用せる歐文は必要と認るものにして原意を害なはずして翻譯し得るものは著者の意^〇譯を附せり。然れど譯し得去るもの又は譯するの必要なものは其儘に存し置けり、故に歐文を解し得ざる人と雖も此書を讀むに於て少しも不利益を感じざる事と信ず。

明治二十六年一月二十八日

攝津中津川の邊に於て

心に慰めを必要とするような苦痛がなく、身に困難が迫ることもなく、穏やかで気楽に人生を送っている人、そして、神聖な精神的な出来事について書かれた記事を、ただ人物批評や文章解釈の材料としてしか見ないような人は、この本から少しも得るものはないでしょう。

しかし、信仰と人情において兄弟姉妹のような関係にあり、私とともに精神の奥深くで霊的な神と交わり、悲しみに沈む人々の魂と、同情や理解を分かち合おうとする人々は、この本から少なからず得るものがあるはずだと信じています。

この本は、私の個人的な自伝ではありません。私は苦しむキリスト教徒を代表して、自らを不幸のどん底に置き、キリスト教の教えによって自分自身を慰めようと努めました。

本文中に引用している西洋の文章は、必要だと判断したもので、元の意味を損なうことなく翻訳できるものは、私の意識をつけました。しかし、翻訳しきれないものや、翻訳する必要があるものはそのまま残してあります。ですから、西洋の言葉がわからない人でも、この本を読む上で不利益を感じることはないと思います。

明治二十六年一月二十八日

摂津中津川のあたりで

第貳版に附する自序

此書世に生れ出てより五ヶ月今や第二版を請求せらるゝに至れり、未だ需要の多からざる純粹基督教書籍にして此に至りしは満足なる結果と稱して可ならむ。第二版は初版と異なる處甚だ少し、誤植を訂正し引用歐文の譯解を増補せしのみ。

著者の據る所は人性深底經檢なり、故に教派的の嫌惡文字的の貶評は彼の辭せざる處なり、若し此「狷介奇僻」の著にしてなほ同胞を慰むるの具たるを得は著者は感謝して止まざるなり。

明治廿六年七月十八日

鐵拐山の麓に於て

内村鑑三

「第貳版に附する自序」 現代語訳

この書が世に出てから五ヶ月が経ち、今では第二版の刊行を求められるまでになりました。キリスト教の純粋な教えを扱った書籍としては、まだそれほど需要が多いとは言えませんが、それでもここまで来られたのは、満足すべき成果と言えるでしょう。第二版と初版との違いは、ほんのわずかです。誤植を訂正し、引用した西洋文の訳注を少し加えただけです。

著者がよりどころとするのは、人間性の深いところにある真理です。ですから、特定の教派への偏見や、文字面だけの批判などは、著者が避けたいところです。もしこの「頑固で風変わりな」著者の書いたものが、同じ信仰を持つ人々の慰めとなるならば、著者としては感謝の念に堪えません。

明治二十六年七月十八日

鉄拐山のふもとにて

内村鑑三

改版に附する序

此書初めて成るや余はもちろんまず第一にこれを余の父に送れり（彼は今は主に在りて雜司ヶ谷の墓地に眠る）。彼れ一讀して涙を流して余に告げて曰く、この書成りて今や汝は死すとも可なり、後世、或は汝の精神を知る者あらんと。余は又その一本を余の舊友M・C・ハリス氏に贈りたり（彼は今や美^{メジスト}以教會の監督として朝鮮國に在り）。彼れ一讀して餘に書送して曰く、この書蓋しペンが君の手より落ちて後にまで存せんと。かくて餘の父と友とに祝福せられて世に出しこの小著は彼らの豫期に違わず、版を磨滅すること二回に及びて、更に又茲に改版を見るに至れり。その文の拙なる、その想の粗なる、取るに足らざる書なりと雖も、しかもその發刊以來十八年後の今日猶お需要の絶えざるを見て、余は暫時的ならざる小著を世に供せしの特權に與りしを深く神に感謝せざるを得ず。願う、余の慈父と師友との祈禱空しからずして、この著の更に世の憂苦を除き去るの一助として存せんことを。

一九一〇年六月二十三日

東京市外柏木において

内村鑑三

「改版に附する序」 現代語訳

この本が初めて完成したとき、私はまず父に送りました（父は今、雑司ヶ谷の墓地で眠っています）。父は一読して涙を流し、「この本が完成したから、今お前が死んでもいい。きつと後世、お前の精神を知る人が現れるだろう」と言ってくれました。また、もう一冊を旧友の M・C・ハリス氏に贈りました（彼は今、メソジスト教会の監督として朝鮮にいます）。彼も一読し、私に手紙で「この本は、君の手からペンが落ちた後も、きつと残り続けるだろう」と書いてくれました。こうして父と友に祝福されて世に出たこの小さな本は、二度も版を重ね、このたび三度目の改版を迎えることになりました。文章はつたないですし、考えも未熟で取るに足りない本かもしれませんが、しかし、発行から十八年経った今もお、必要とされ続けているのを見て、私は「一時的なものではない本を世に送り出す」という特別な機会を与えられたことを、心から神に感謝せずにはいられません。どうか、慈愛深い父と、師であり友であるハリス氏の祈りが無駄にならず、この本がさらに多くの人の心から苦しみを取り除く一助となることを願っています。

一九一〇年六月二十三日

東京市外柏木において

内村鑑三

回顧三十年

此書今年を以て發行滿三十年に達す。大なる光榮である。感謝に堪へない。

今より三十年前に日本に於て日本人の基督教文學なる者はなかつたと思ふ。若しあつたとすれば、それは歐米基督教文學の翻譯であつた。日本人自身が基督教の事について獨創の意見を述べんと欲するが如き、僭越の行爲である乎の如くに思はれ、敢て此事を為す者はなかつた。丁度其頃の事であつた、米國の學校に於て余と同級生たりし米國人某氏が余を京都の寓居に訪うた。彼は余に問うて曰うた「君は今何を爲しつゝある乎」と。余は彼に答へて曰うた「著述に従事しつゝある」と。彼は更に問ふて曰うた「何を翻譯しつゝあるか」と。余は答えて曰うた「余は自分の思想を著はしつゝある」と。此答に對して彼は「本當に！」と曰うより他に辭ことばがなかつた。誠に當時の米國人（今も猶然り）の日本の基督教信者に對する態度は大抵如斯格かくのうごときものであつた。そして斯格き時に方あたりて、歐米の教師に依らずして、直に日本人自身の信仰的實驗又は思想を述べんと欲するが如きは大胆極まる企圖くわだてであつた。然るに余は神の佑助たすけに由り恐る々々此事を行やつて見た。殊に何よりも文學を嫌ひし余のことであれば、美文として何の取るべき所なきは勿論であつた。余はたゞ心の中に燃る思念おもひに強いられ止むを得ず筆を執つたのである。

此書初めて出て第一に之を歡迎して呉れた者は當時の『護教』記者故山路愛山君であつた。君は感興の余り鐵道馬車の内に在りて之を通讀したりと云ふ。然し其他に基督教會の名士又は文士にしてこれを歡迎して呉れた者は

なかつた。或は「困難の間屋である」と云ひて冷笑する者もあり、或は「國人に捨られし時」なども唱へて自分を國家的人物に擬するは片腹痛しと嘲ける者もあつた。然し余は教會と教職とに問はずして直ちに人の靈魂に訴へた。而して數萬の靈魂は余の靈魂の叫さけびに應こたえて呉た。余の執筆の業は此小著述を以て始つた。余は此著を以て獨り基督教文壇に登つた。而して教會並に教職の同情援助は余の身に伴はざりしと雖も、神の恩恵と平信徒の同情との余に加はりしが故に、余は今日に至るを得たのである。教會の援助同情の信仰的事業の成功に何等の必要なき事はこの一事を以ても知らるゝのである。神は日本人を以て日本國を救ひ給ふと信ずる。神は日本に日本特有の基督教文學を起し給ひし事を感謝する。此書小なりと雖も、外國宣教師の手を離れ、教會の力を藉^からずして、直に神に聽つゝ其御言を傳ふる卒先者の一たりし事を以て光榮とする。余はまた茲にエベネゼル（助けの石）を立て、サムエルと共に之に記して曰ふ「エホバ茲まで我を助け給へり」と（撒母耳^{サムエル}前書七章十二節）。

大正十二年（一九二三年）二月七日

東京市外柏木において

内村鑑三

この本は、今年で発行からちょうど三十年を迎えました。これは私にとって大きな喜びであり、感謝に堪えません。

今から三十年前、日本には日本人の手によるキリスト教文学はほとんどなかったように思います。もしあったとしても、それは欧米のキリスト教文学の翻訳ばかりでした。日本人自身がキリスト教について独自の意見を述べるなど、当時はとても僭越な行為だと考えられており、あえてそのようなことをする人はいませんでした。ちょうどその頃、アメリカの学校で同級生だったアメリカ人が、京都にあつた私の下宿を訪ねてきました。彼は私に「今、何をしていますのですか」と尋ねました。私は「執筆活動をしています」と答えました。すると彼はさらに「何を翻訳しているのですか」と聞きました。私は「自分の考えを本にしているとどこです」と答えました。この答えを聞いて、彼は「本当に！」と驚くほかありませんでした。当時のアメリカ人（そして今もなお）の、日本のキリスト教徒に対する態度は、だいたいこのようなものでした。そのような時代に、欧米の教師に頼らず、日本人自身の信仰体験や思想を直接述べようとするのは、極めて大胆な試みでした。しかし、私は神の助けによって、恐る恐るこのことを実行しました。特に、何よりも文学を嫌っていた私ですから、美しい文章など書けるはずありませんでした。ただ、心の中に燃える思いに突き動かされ、やむを得ず筆を執ったのです。

この本が世に出て、最初に歓迎してくれたのは、当時の『護教』の記者であつた故・山路愛山君でした。彼は

感動のあまり、鉄道の馬車の中で一気に読み通したそうです。しかし、それ以外にキリスト教界の著名人や文学者で、この本を歓迎してくれる人はいませんでした。ある人は「困難の間屋だ」と冷笑し、またある人は「国民に見捨てられた時」などと、自分を国家的な人物であるかのように振る舞うのは滑稽だと嘲笑しました。しかし、私は教会や聖職者ではなく、直接人々の魂に訴えかけました。そして、何万人もの人々が私の魂の叫びに応えてくれました。私の執筆活動はこの小さな本から始まりました。この本によって、私はキリスト教文壇に足を踏み入れたのです。教会や聖職者の同情や援助は私にはありませんでしたが、神の恵みと、一般の信徒の方々の温かい心があつたからこそ、私は今日まで続けることができました。信仰に基づいた事業の成功には、必ずしも教会の援助や同情が必要ではないということが、この事実一つをとってもわかるのです。私は、神が日本人を通して日本を救つてくださると信じています。神が日本に日本独自のキリスト教文学を興してくださったことに感謝します。この本は小さなものですが、外国人宣教師の手から離れ、教会の力を借りることなく、直接神の御声に耳を傾け、その御言葉を伝える先駆者の一人であつたことを光栄に思います。

私はここに、エベネゼル（助けの石）を立て、サムエルと共に記して言います。「主はここまで私たちを助けてくださった」と（サムエル記第一 第七章十二節）。

大正十二年（一九二三年）二月七日

東京市外柏木にて

内村鑑三

目次

第一章	愛するものゝ失せし時
第二章	國人に捨てられし時
第三章	基督教會に捨てられし時
第四章	事業に失敗せし時
第五章	貧に迫りし時
第六章	不治の病に罹りし時
附 録	未來觀念の現世に於ける事業に及ぼす勢力

第一章 愛するものゝ失せし時

我は死に就ては生理學より學べり。之を詩人の哀歌に讀めり。之を傳記者の記錄に見たり。時には死體を動物學實檢室に解剖し、生死の理由を研究せり、時には死と死後の有様に就て高壇より公衆に向て餘の思想を演べたり。人の死するを聞くや、或は聖經の章句を引用し、或は英雄の死に際する時の狀さまを語て、死者を悲む者を慰めんとし、若し餘の言に依て氣力を回復せざるものある時は世は心竊ひそかに其人の信仰薄きを歎じ理解の鈍きを責めたり、餘は知れり死は生を有するものゝ避くべからざる事にして、生物界連續の必要なるを、且つ思へらく古昔いにしへの英雄或は勇み或は感謝しつゝ世を去れり、餘も何ぞ均しく爲し能はざらんやと、殊に宗教の助あり、復活の望あり、若し餘の愛するものゝ死する時には余は其枕邊に立ち、讚美の歌を唱へ、聖書を朗讀し、曾て彼をしてその父母の安否を問はんが爲め一時郷里に歸省せしむる時讚美と祈禱とを以て彼の旅出を送りし時、暫時の離別も苦しけれ共又遭ふ時の悦を樂み、涙を隠し愁懼を包み、潔よく彼の門出を送りし如く彼の遠逝を送らんのみと。嗚呼余は死の學理を知り、又心靈上其價值さじを了れり、然れ共其深さ、痛さ、悲さ、苦さは其寒冷なる手が余の愛するものゝ身に來り、余の連夜熱血を灌ぎて捧げし祈禱をも省みず、余の全心全力を擲ち余の命を捨てゝも彼を救はんとする誠心をも省みず、無慙にも無慈悲にも余の生命より貴きものを余の手よりモギ取り去りし時始めて豫察するを得たり。

生命は愛なれば愛せるものゝ失せしは余自身の失せしなり、此完全最美なる造化、其幾回となく余の心をして

絶大無限の思想界に逍遙せしめし千萬の不滅燈を以て照されたる蒼穹あおぞらも、其春來る毎にに余に永遠希望の雅歌を歌ひくれし比翼を有する森林の親友も、其菊花香しき頃ぎ々として千秋に聳へ常に余に愛國の情を喚起せし芙蓉の山も、余が愛するものゝ失せてより、星は光を失て夜暗く、鶯は哀歌を弾じて心を傷ましむ、富嶽も今は余のものならで、曾て異郷に在りし時、モナドナツクたふせんけいの倒扇形を見、コトバキシの高きを望みし時、我故郷ならざりしが故にその美と嚴とは反て孤獨悲哀の情を喚起せし如く、此世は今異郷と變じ、余は尙ほ今世の人なれ共己に此世に屬せざるものとなれり。

愛せしものゝ死せしより來る苦痛は僅かに此世を失なひしに止まらざりしなり、此世は何時か去るべきものなれば今之を失ふも三十年の後に失ふも大差なかるべし、然れ共余の誠心まごころの貫かざるより、余の満腔の願として溢出せし祈禱の聽かれざるより（人間の眼より評すれば）余は懷疑の惡鬼に襲はれ、信仰の立つべき土臺を失ひ、之を地に求めて得ず、之を空に探て當らず、無限の空間余の身も心も置くべき處なきに至れり。之ぞ眞實の無間地獄にして永遠の刑罰とは是事を云ふならんと思へり、余は基督教を信ぜしを悔ひたり、若し余に愛なる神てう思想なかりせば此苦痛はなかりしものを、余は人間と生れしを歎ぜり、若し愛情てうものゝ余に存せざりしならば余に此落膽なかりしものを、嗚呼如何にして此れ傷を愈すを得んや。

醫師余の容軀を見て奮興劑と催眠藥とを勧む、然れ共何物か傷める心を治せんや、友人は轉地と旅行とを勧む、然れ共山川今は余の敵なり、哲理的の冷眼を以て死を學び思考を轉ぜんとするも得ず、牧師の慰言も親友の勸告も今は怨恨を起すのみにして、余は荒熊の如くになり「愛するものを余に歸せよ」と云ふより外はなきに至れり。

嗚呼余を醫する藥はなきや、宇宙間余を復活せしむる力は存せざる乎、萬物悉く希望あり、余のみ失望を以て終るべき乎。

時に聲あり胸中に聞ゆ、細くして殆ど區別し難し、尙ほ能く聞かんと欲して心を沈むれば其聲なし、然れ共惡靈懷疑と失望とを以て餘を挫かんとする時其聲又聞ゆ、曰く「生は死より強し、生は無生の土と空氣とを變じアマゾンの森となすが如く、生は無靈の動物軀を取り汝の愛せし眞實と貞操の現象となせし如く、生は人より天使を造るものなり、汝の信仰と學術とは未だ斯に達せざるか、此地球が未だ他の惑星と共に星雲として存せし時、又は凝結少しく度を進め一つの溶解球たりし時、是ぞ億萬年の後シヤロンの薔薇を生じレバノンの常盤樹を繁茂せしむる神の樂園とならんとは誰か量り知るを得しや。最始の博物學者は蛄蜥けむしの變じて蛹と成りしときは生虫の死せしと思ひしならん。他日美翼を翺へし日光に逍遙する蛾は曾て途上に匍匐せし見惡みにかりしものなりとは信ずる事の難かりしならん。暗黒時代より信仰自由と代議政軀生れ、卅年戦争の劇場として殆ど砂漠と成りし獨逸こそ今は中央歐羅巴の最強國となりしにあらずや、地球と人類が年を越ゆる程生は死に勝ちつゝあるにあらずや、然らば望と徳とを有し神と人とに事へんと己を忘れし汝の愛するものが今は死軀となりしとて何ぞ失望すべけんや、理學も歴史も哲學も皆希望を説教しつゝあるに何ぞ汝獨り失望教を信ずるや。

Life mocks the idle hate

Of his arch—enemy Death,—yea sits himself

Upon the tyrant's throne, the sepulchre,

And of the triumphs of his ghostly foe

Makes his own nourishment —* Bryant

然り余は信ず余の救主は死より復活し玉ひしを、義人を殺して其人死せりと信ぜし猶太人の浅猿さよ、何ぞヒマラヤ山を敲たたひて山崩れしと信ぜざる、余が愛するものは死せざりしなり、自然は自己の造化を捨てず、神は己の造りしものを輕ずべけんや、彼の軀は朽しならん、彼の死軀を包みし麻の衣は土と化せしならん、然れども彼の心、彼の愛、彼の勇、彼の節——嗚呼若し是等も肉と共に消ゆるならば、萬有は我等に誤謬を説き、聖人は世を欺けり、余は如何にして如何なる軀を以て如何なる處に再び彼を見るやを知らず、唯

Love does dream, Faith does trust

Somehow, somewhere meet we must. — Whitier.

愛の夢想を我疑はじ

どう どうか
何様か何處で相見んと

然れども彼は死せざるものにして余は何時彼と相會する事を得ると雖も彼の死は余に取ては最大不幸なりしに相違なし、神若し神なれば何故に余の祈禱を聴かざりしや、神は自然の法則に勝つ能はざるか、或は祈禱は無益

なるものなるか、或は余の祈禱に熱心足らざりしか、或は余の罪深きが故に聞かれざりしか、或は余を罰せんが爲に此不幸を余に降だせしか、是れ余の間かんと欲せし所なり。細き聲又曰く、「自然の法則とは神の意なり、雷は彼の聲にして嵐は彼の口笛なり、然り、死も亦彼の天使にして彼が彼の愛するものを彼の膝下に呼ばんとする時遣し賜ふ勅使なり」と。

嗚呼誰か神意と自然の法則とを區別し得るものあらんや、神若し余の愛するものを活かさんと欲せば自然の法則に由て活かせしのみ、余輩神を信ずるものは之に依て神に謝す、然れども神を信ぜざるものは或は之を醫藥の效に歸し、或は衛生の力に歸し、治癒の元なる神を讚美せざるなり、神の何たるを知り、自然の法則の何たるやを知れば「神は自然に負けたり」との言は決して出づべきものにあらず。然らば祈る何の要がある、神は祈禱に應じて雨を賜はず、また聖者の祈禱に反して種々の難苦を下せり、祈らずして神命に従ふに若かず、祈禱の要は何處にあるや。

是難問なり、余は余の愛するものゝ失せしより數月間祈禱を廢したり、祈禱なしには箸を取らじ、祈禱なしには枕に就かじと堅く誓ひし余さへも今は神なき人となり、恨を以て膳に向ひ、涙を以て寢所に就き、祈らぬ人となるに至れり。

嗚呼神よ恕し賜へ、爾は爾の子供を傷つれたり、彼は痛の故に爾に近づく事能はざりしなり、爾は彼が祈らざる故に彼を捨てざりしなり、否な、彼が祈りし時に勝りて爾は彼を恵みたり、彼祈り得る時は爾の特別の恵と慰とを要せず、彼祈り能はざる時彼は爾の擁護を要する最も切なり、余は慈母がその子の病める時に言語に禮を失

し易く、小言がましき時に當て慈愛の情の平常に勝り病子を看護するを見たり、爾無限の慈母も余の痛める時に余を愛する余が平常無事の時の比にあらざるなり、余の愛するもの失して後、余が宇宙の漂流者となりし時、其時こそ爾が爾の無限の愛を余に示し得る時にして、余が爾を捨んとする時爾は余の迹を逐ひ余をして爾を離れ得ざらしむ。

然り祈禱は無益ならざりしなり、十數年間一日のごとく朝も夕も爾に祈りつゝありしが故に今日此思はざるの喜と慰とを爾より受くるを得るなり。

嗚呼父よ、余は爾に感謝す、爾は余の祈りを聽賜へり、汝曾て余に教へて曰く、肉の爲に祈る勿れ靈の爲に祈れよと、而して余は余の愛するものと共に爾に祈るに此世の幸福を以てせざりしなり、若しその爲に祈りし時は必ず「若し御意に叶はば」の語を付せり、自己の願事を聽かば信じ、聽ずば恨むは之れ偶像に願を掛けるものゝ爲す所にして、基督信者の爲すべき事にあらざるなり、嗚呼余は祈禱を廢すべけんや、余は今夕より以前に勝る熱心を以て同じ祈禱を爾に捧ぐべし。

時に惡靈余に告て曰く、「汝祈禱の熱心を以て不治の病者を救いし例を知らざるか、汝の祈禱の聽かれざりしは汝の熱心足らざりしが故なり」と、若し然らば余の愛するものゝ死せしは余の熱心の足らざりしが故か、然らば彼を死に至らしめし罪は余にあり、余は實に余の愛せしものを殺せしものなり、若し熱心が病者を救ひ得ば其熱心を有せざる人こそ憐むべきかな、余は余の信仰の足らざるを知る、然れ共余は余の熱心のあらん限り祈りたり、而して聽かれざりしなり、若し尚ほ余の熱心の足らざるを以て余を責むるものあらば、余は余の運命に安ずるよ

り他に途なきなり。

嗚呼神よ、爾は我等の有せざるものを請求せざるなり、余は余の有する丈の熱心を以て祈れり、而して爾は余の愛するものを取去れり、父よ、余は信ず、我等の願ふ事を聽かれしに依て爾を信ずるは易し、聽かれざるに依て尚ほ一層爾に近づくは難し、後者は前者に勝りて爾より特別の恩恵を受けしものなるを、若し私の熱心にして爾の聽かざるが故に挫けむものならば爾必ず私の祈禱を聽かれしならん。

嗚呼感謝す、嗚呼感謝す、爾は余の此大試鍊に堪ゆべきを知りたればこそ余の願を聽賜はざりしなり、余の熱心の足らざるが故にあらずして反て余の熱心（爾の恵に因て得し）の足るが故に此苦痛ありしなり、嗚呼余は幸福なるものならずや。

愛なる父よ、余は信ず、爾は我等を罰せん爲に艱難を下し賜はざる事を、罰なる語は爾の如何なるものなる乎を知るものゝ字典に存すべき語にあらざるなり、罰は法律上の語にして基督教でふ律以上の範圍に於ては要もなき意味もなき名詞なり、若し強て此語を存せんとすれば「暗く見ゆる神の恵」なる定義を附して存すべきなり、刑罰なる語を以て爾に愛せらるゝものを屢々威嚇する爾の教役者をして再び爾の聖書を探らしめ、彼等の誤謬を改めしめよ。

然れども余に一事忍ぶべからざるあり、彼何故に不幸にして短命なりしや、彼の如き純白なる心靈を有しながら、彼の如く全く自己を忘れて彼の愛するものゝ爲に盡しながら、彼に一日も心痛なきの日なく、此世に眼開てより眼を閉しまで、不幸艱難打續き、而して後彼自身は非常の苦痛を以て終れり、此解すべからざる事實の中に

如何なる深意の存するや余は知らんと欲するなり。

聖書に云はずや地は神を敬するものゝ爲に造られたりと、(約百十五章十九節)。然るに此最も神を慕ひしものは最わずかに此世を樂んで去れり、ブラジル國の砂中に埋もる大金剛石は誰の爲に造られしや、無辜を虐げ眞理を蔑視する女帝女王の頭を飾る爲にか、或は安逸以て貴重なる生命を消費し、春は花に秋は月に此の神聖なる神の職工場 (God's Task-garden) を以つ一つの遊戯場と見做す懶惰男女の指頭と襟とに光澤を加へむ爲にか、東台の櫻、龜井戸の藤は黃土の爲に身を汚し天使の形に惡鬼の靈を注入せし妖怪物の特有なるか、誰が爲に富嶽は年々壯嚴なる白冠を戴くや、誰が爲に富士川の銀線は其麓を縫ふや、最も清きもの最も愛すべきものには朝より夕まで、月滿てより月缺るまで、彼の視線は一小屋の壁に限られ、聽くべきものとは彼の援助を乞ふ痛めるものゝ聲あるのみ、嗚呼造化は此最良最美の地球を惡魔と其子供に讓與せしか。

余は了解せり宇宙のこの隱語を、此美麗なる造化は我等が之を得ん爲めに造られしにあらずして、これを捨てんが爲めに造られしなり、否な、人若し之を得んと欲せば先ず之を捨てざるべからず (馬太傳十六章廿五節)、誠に實に此世は試鍊の場所なり、我等意志の深底より世と世の總を捨て後始めて我等の心靈も獨立し世も我等のものとなるなり、死て活き、捨て得る、基督教の「パラドックス」(逆説) とは此事を云ふなり、余の愛するものは生涯の目的を達せしものなり、彼の宇宙は少なりし、然れども其小宇宙は彼を靈化し、彼を最大宇宙に導くの階段となれり、然り神は此地を神を敬するものゝ爲めに造り玉えり。

余は余の失ひしものを思ふ毎に余をして常に斷腸後悔殆ど堪ゆる能はざるあり、彼が世に存せし間余は彼の愛

に慣れ、時には不興を以て彼の微笑に報い、彼の眞意を解せずして彼の余に對する苦慮を増加し、時には彼を呵嘖し、甚しきに至りては彼の病中余の援助を乞ふに當て——假令數月間の看護の爲めに余の身も精神も疲れたるにもせよ——荒らかなる言語を以て之に應ぜざりし事ありたり、彼は渾て柔和に渾て忠實なるに我は幾度か嚴酷にして不實なりしや、之を思へば余は地に恥ぢ天に恥ぢ、報ゆべきの彼は失せ、免を乞ふの人はなく、余は悔い能はざるの後悔に困められ、無限地獄の火の中に我身で我身を責め立てたり。

一日余は彼の墓に至り、塵を拂ひ花を手向け、最高きものに祈らんとするや、細き聲あり——天よりの聲か彼の聲か余は知らず——余に語て曰く「汝何故に汝の愛するものゝ爲めに泣くや、汝尚ほ彼に報ゆるの時をも機をも有せり、彼の汝に盡せしは汝より報を得んが爲めにあらず、汝をして内に顧みざらしめ汝の全心全力を以て汝の神と國とに盡さしめんが爲めなり、汝若し我に報ひんとならば此國此民に事えよ、渠の家なく路頭に迷ふ老婦は我なり、我に盡さんと欲せば彼女に盡せ、渠の貧に迫せめられて身を耻辱の中に沈むる可憐の少女は我なり、我に報ひんとならば彼女を救へ、渠の我の如く早く父母に別れ憂苦頼るべきなき兒女は我なり、汝彼女を慰むるは我を慰むるなり、汝の悲歎後悔は無益なり、早く汝の家に歸り、心思を磨き信仰に進み、愛と善との業を爲し、靈の王國に來る時は夥多の勝利の分捕物を以て我主と我とを悦ばせよ」と。

嗚呼如何なる聲ぞ、曾てパマカスなる人が妻ポーリナを失ひし時、聖ジェロームが彼を慰めん爲めに「他の良人は彼等の妻の墓を飾るに莖菜草と薔薇花とを以てするなれど我がパマカスはポーリナの聖なる遺骨を濕すに慈善の香乳を以てすべし」と書送りしは蓋し余が余の愛するものゝ墓に於て心に聞きし聲と均しきものならん、

よし今日よりは以前に勝る愛心を以て世の憐むべきものを助けん、余の愛するものは肉身に於ても失せざりしなり、余は尚ほ彼を看護し彼に報得べきなり、斯國斯民は余の愛するものゝ爲めに余に取ては一層愛すべきものとなれり。

一婦人の爲に心思を奪はれ殘餘の生を無益の悲哀の中に送るは情は情なるべけれ共是眞正の勇氣にあらず、基督教は情性を過敏ならしむるが故に悲哀を感じしむる亦從て強し、然れ共眞理は過敏の情性を鍊り無限の苦痛の中より無限の勇氣を生ずるものなり、アナ、ハセルトン婦の死は宣教師ジャドソンをして益々猛勇忠實ならしめたり、メリー、モフハト婦の死は探檢家リビングストンをして暗黒大陸に進入する事益々深からしめたり、詩人シルレルの所謂

Der starke ist machtingsten allein.

(勇者は獨り立つ時最も強し)

の言は蓋し此意に外ならじ、若し愛なる神の在まして勇者を一層勇ならしめんとならば其愛するものをモギ取るに勝れる法はなかるべし。

余は余の愛するものゝ失せしに因て國も宇宙も——時には殆ど神をも——失いたり、然れ共再び之を回復するや、國は一層愛を増し、宇宙は一層美と壯宏とを加へ、神には一層近きを覺へたり、余の愛するものゝ肉體は失せて彼の心は余の心と合せり、何ぞ思きや眞正の配合は却て彼が失せし後にありしとは。

然り余は萬を得て一つを失はず、神も存せり、彼も存せり、國も存せり、自然も存せり、萬有は余に取りては

彼の失せしが故に改造せられたり。

余の得し所之に止まらず、余は天國と縁を結べり、余は天國てふ親戚を得たり、余も亦何日か此涙の里を去り、余の勤務を終へて後永き眠に就かむ時、余は無知の異郷に赴くにあらざれば、彼が曾て此世に存せし時彼に會して余の勞苦を語り終日の疲勞を忘れむと、業務も其苦と辛とを失ひ、喜悅を以て家に急ぎし如く、殘余の此世の戦ひも相見む時を樂みに能く戦ひ終へし後心嬉しく逝かむのみ。

第一章 愛するものゝ失せし時 現代語訳

死について、私は生理学から学びました。詩人の哀歌にその死を読み、伝記者の記録にも見ました。時には動物学の実験室で死体を解剖し、生と死の理由を研究しました。また時には、死と死後のあり方について、高い壇上から人々に私の考えを語りました。人が亡くなったと聞けば、ある時は聖書の言葉を引用し、ある時は英雄の死に際する様子を語って、悲しんでいる人を慰めようと思いました。もし私の言葉で氣力を回復しない人がいれば、その人が信仰が薄いのだとひそかに嘆き、理解が鈍いと責めました。私は知っています。死は生きている者にとって避けられないことであり、生物の世界が続いていくために必要なことなのだ。そして、昔の英雄が勇ましく、あるいは感謝しながらこの世を去ったように、私もどうして同じようにできないことがあるうかと考えました。特に宗教の助けがあり、復活の望みがあればなおさらです。もし私の愛する人が亡くなるときは、その枕元に立ち、賛美歌を歌い、聖書を読みます。かつて、その人に両親の安否を尋ねさせるため、一時的に故郷へ帰省させたとき、賛美と祈りをもって旅立ちを見送りました。そのとき、一時的な別れはつらいけれども、また会えるときの喜びを楽しみ、涙を隠し、心配を包み隠して、潔く送り出したように、愛する人の遠い旅立ちを見送るだけです。

ああ、私は死の理論を知り、また精神の上でもその価値を理解していました。しかし、その深さ、痛み、悲し

み、苦しみは、その冷たい手が私の愛する人の身に迫り、私が毎夜、熱い血潮を注いで捧げた祈りも顧みず、私の全心を投げ打ち、命を捨てても彼女を救おうとする真心を顧みず、無残にも無慈悲にも、私の命よりも貴いものを私の手から無理やり引きはがし去った時、初めて予期することができました。

命が愛であるなら、愛するものを失ったことは、私自身を失ったことになる。この完全で、最も美しい自然の造形、それは何度も私の心を果てしない思想の世界へとさまよわせてくれた、数えきれない不滅の灯りに照らされた青空も、春が来るたびに私に永遠の希望の歌をささやいてくれた、翼を並べるような親友のいる森も、菊の香りが漂う頃に、堂々と千年の時を越えてそびえ立ち、いつも私に祖国への思いを呼び起こしてくれた芙蓉の山も私の愛するものがいなくなってしまうから、星は光を失って夜は暗く、鶯は悲しい歌を奏でて、心を痛ませる。富士の山も、今ではもう私のものではない。かつて異国にいたとき、モナドナツクの扇を伏せたような姿を見たり、コトバキシの高みを仰ぎ見たりしたが、それが故郷ではなかったからこそ、その美しさと厳しさは、かえって孤独と哀しみを呼び起こしたように思う。今やこの世界そのものが異郷となり、私はまだこの世に生きてはいるけれど、もはやこの世に属していない者になってしまった。

愛する人が死んでからというもの、私の苦痛は単にこの世を失っただけにとどまらなかった。この世はいつか去るべきものなのだから、今失おうと三十年後に失おうと、大した違いはないだろう。しかし、私の偽りのない心を通じなかったこと、心からあふれ出た祈りが聞き届けられなかったこと（人間の目から見れば）によって、私は疑いの悪鬼に襲われ、信仰が立つべき土台を失ってしまった。地上に安らぎを求めても見つからず、空を探

し求めても手がかりはなく、果てしない空間に私の身も心も置く場所がなくなってしまった。これこそが本当の無間地獄であり、永遠の刑罰とはこのことなのだろうと思える。私はキリスト教を信じたことを後悔した。もし愛の神という思想が私になかったら、この苦痛もなかっただろうに。私は人間として生まれたことを嘆いた。もし愛情というものが私に存在しなかったなら、このような失望もなかっただろうに。ああ、どうすればこの心の傷を癒せるのだろうか。

医者は私の様子を見て、興奮剤と睡眠薬を勧めます。しかし、一体何がこの傷ついた心を治してくれるのでしょうか。友人は転地や旅行を勧めますが、今の私にとって、山や川は敵でしかありません。哲学的に冷静な目で死を学び、考えを変えようと試みても、うまくいきません。牧師の慰めの言葉も、親友の忠告も、今はかえって恨みしか生みません。私はまるで荒れ狂う熊のようになり、「愛する人を私に返せ」と叫ぶことしかできなくなっていました。

ああ、私を癒す薬はないのだろうか。この宇宙に、私を生き返らせる力は存在しないのだろうか。すべてのものに希望があるのに、私だけが絶望で終わってしまうのだろうか。

時々、心の中に声が聞こえてくる。とてもか細いので、ほとんど聞き分けられないほどだ。よく聞こうと心を落ち着かせると、その声は消えてしまう。しかし、悪霊が疑いや失望で私を打ちのめそうとするとき、その声はまた聞こえてくる。生は死よりも強い。生が無機質な土や空気をアマゾンの森に変えたように、生が魂のない動

物の体をとらえ、お前が愛した真実や貞操という美しい姿を形作つたように、生は人間から天使を創り出すものだ。お前の信仰や学問はまだその域に達していないのか。この地球がまだ他の惑星とともに星雲の中にあつた頃、あるいは少し固まって溶けた球だった頃、誰が何億年もの後に、ここがシャロンのバラを咲かせ、レバノンの常緑樹が茂る神の楽園になると想像できたのだろうか。最初の博物学者は、毛虫がサナギになったとき、その生き物が死んだと思つただろう。後日、美しい羽を広げて日光の中を飛び回る蛾が、かつて道端を這い回っていた醜い生き物だったとは、信じがたいことだったに違いない。暗黒時代からは信仰の自由と議会制民主主義が生まれ、三十年戦争の舞台となつてほとんど砂漠と化したドイツは、今や中央ヨーロッパで最も強い国になったではないか。地球と人類が年月を重ねるほど、生は死に勝ち続けているのではないか。ならば、希望と徳を持ち、神と人々に仕えようと自己を忘れて献身した、お前の愛する人が、たとえ今は亡骸となつたとしても、どうして失望することがあろうか。科学も歴史も哲学も、すべてが希望を説いているのに、なぜお前だけが失望を信じるのか。

「命は、死という宿敵の空しい憎しみを嘲笑う。

そしてその暴君の玉座―墓所―に自ら座し、

幽霊のような敵の勝利さえも、

自らの糧として取り込むのだ。」―ブライアント

はい、私は信じています。私の救い主は死から復活された。正しい人を殺し、その人が死んでしまったと信じているユダヤ人たちは、なんて浅はかだったのでしょうか。ヒマラヤ山を叩いて、山が崩れたと信じるようなも

のです。私が愛する方は、死なれなかったのです。自然は自らが作り出したものを捨てることはありません。ましてや神が、ご自身が創造されたものを軽んじられることがあるでしょうか。彼女の肉体は朽ち果てたかもしれませんが、彼女の亡骸を包んでいた亜麻布も土に還ったかもしれません。しかし、彼女の心、彼女の愛、彼女の勇氣、彼女の真実―もしこれらも肉体と共に消え去るのなら、この世のすべては私たちに誤りを説いており、聖人たちは世を欺いていたことになります。私は、どのような体で、どのような場所で、再び彼女に会えるのかはわかりません。ただ、

愛の夢を、私は疑うまい。

どうにかして、どこかで再び会えるはずだと。

しかし、彼女は死ななかったとしても、私にとって彼女の死は最大級の不幸だったことに変わりはありません。神がもし本当に神であるなら、なぜ私の祈りを聞き届けてくれなかったのでしょうか。神は自然の法則に打ち勝つことができないのでしょうか。それとも、祈りは意味がないものなのでしょうか。あるいは、私の祈りは熱心が足りなかったのでしょうか。私の罪が深かったせいで、聞き入れられなかったのでしょうか。それとも、私を罰するために、この不幸を与えられたのでしょうか。これが、私が聞きたかったことでした。すると、細い声が再びこう語りかけました。「自然の法則とは、神の意志である。雷は彼女の声であり、嵐は彼女の口笛である。そう、死もまた彼女の天使であり、彼女が愛する者たちを、彼女の膝元へ呼ぼうとする時に遣わされる勅使なのだ」と。

ああ、いったい誰が、神の意志と自然の法則を区別できるのでしょうか。もし神が、私が愛する人を生かしたいと思われたなら、自然の法則を通して生かしたにすぎません。私たちのように神を信じる者は、そのことによって神に感謝します。しかし、神を信じない人たちは、それを薬の効果や、衛生の力だと思い込み、本当の治癒の源である神をたたえることはありません。神がどのような存在であるか、そして自然の法則が何であるかを知れば、「神は自然に負けた」などという言葉は決して出てこないはずです。そうだとすれば、祈ることになったい何の意味があるのでしょうか。神は祈りに応じて雨を降らせてくれないこともありますし、聖なる人々の祈りにもかかわらず、さまざまな苦難を与えたりもします。祈るよりも、ただ神の命令に従うほうがいいのではないか。祈ることの必要性は、いったいどこにあるのでしょうか。

これは難しい問題です。私は愛する人を亡くして以来、数ヶ月間祈りをやめていました。祈らずには箸を取らない、祈らずには眠らないと固く誓っていた私でさえ、今は神を信じない人のようになり、恨みを抱いて食事をし、涙を流して床につき、祈ることのない人になってしまいました。

ああ、神よ、どうかお赦してください。あなたはあなたの子どもを傷つけました。彼女は痛みのためにあなたに近づくことができなかつたのです。あなたは彼女が祈らなかつたからといって、彼女を見捨てませんでしたね。いいえ、彼女が祈っていた時以上に、あなたは彼女に恵みを与えてくれました。彼女が祈れる時は、あなたの特別な恵みや慰めを必要としません。彼女が祈れない時こそ、彼女はあなたの助けを最も必要とするのです。私は、優しい母親が、病気になる子どもが言葉遣いを乱したり、わがままを言ったりする時ほど、普段以上に深い愛

情を持って看病するのを見してきました。あなたという無限の慈愛に満ちた母も、私が苦しんでいる時に、平穏な時とは比べものにならないほど私を愛してくれているのです。愛する人を失ってから、私が宇宙をさまよう漂流者のようになった時、その時こそ、あなたがあなたの無限の愛を私に示すことができる時でした。私があなたから離れようとする時、あなたは私の後を追ひ、私をあなたから離れられないようにしてくださいます。

そうです、祈りは無駄ではなかったのです。十数年間、まるで一日であるかのように朝も夜もあなたに祈り続けていたからこそ、今日、この思いがけない喜びと慰めをあなたから受け取ることができたのです。

ああ、父よ。私はあなたに感謝します。あなたは私の祈りを聞き届けてくださいました。あなたはかつて私に「肉のために祈ってはならない、霊のために祈りなさい」と教えました。そのため、私は愛する人と共に、この世の幸福を願って祈ることはありませんでした。もし何かを願って祈る時は、必ず「もし御心にかなうならば」という言葉を付け加えていました。自分の願いが聞き届けられたら信じ、聞き届けられなければ恨むというのは、偶像に願いをかける人々のすることであり、キリスト信徒がすべきことではありません。ああ、私はどうして祈りをやめることができませんでしたか。私は今夜から、以前にも増して熱心に、同じ祈りをあなたに捧げます。

時々、悪霊が私にこうささやきます。「おまえは、祈りの熱心さで不治の病人を救った例を知らないのか。おまえの祈りが聞き届けられなかったのは、おまえの熱心さが足りなかったからだ」と。もしそれが本当なら、愛する人が亡くなったのは私の熱心さが足りなかったせいなのでしょう。だとすれば、彼女を死なせた罪は私にあります。私は、本当に愛する人を殺してしまった者なのです。もし熱心さが病人を救うことができるのなら、そ

の熱心さを持たない人はなんと憐れなことでしょう。私は自分の信仰が足りないことを知っています。しかし、私は自分のできる限りの熱心さで祈りました。それでも、祈りは聞き届けられませんでした。もしそれでもなお、私の熱心さが足りないとして私を責める者がいるなら、私は自分の運命を受け入れるより他に道はありません。

ああ、神よ、あなたは私たちが持っていないものを要求したりはしないでしょう。私は、私が持つ限りの熱心さで祈りました。それでもあなたは、私の愛する人を連れ去ったのです。父よ、私は信じます。私たちが願うことを聞き届けられたことによって、あなたを信じるのは簡単です。しかし、聞き届けられなかったことによって、なお一層あなたに近づくのは難しいことです。後者のほうが、前者よりもあなたから特別な恵みを受けた人なのです。もし私の熱心さが、あなたが祈りを聞き入れないという理由でくじけるようなものだったなら、あなたはきっと私の祈りを聞き入れてくださったことでしょう。

ああ、感謝します。ああ、感謝します。あなたは私がこの大きな試練に耐えられると知っていたからこそ、私の願いを聞き入れてくださらなかったのですね。私の熱意が足りなかったからではなく、かえって、あなたの恵みによって得た私の熱意が十分であつたからこそ、この苦痛があつたのです。ああ、私はなんと幸せな者でしょうか。

愛する父よ、私は信じています。あなたは私たちを罰するために艱難をお与えになるのではないということを。

「罰」という言葉は、あなたがどのような方であるかを知っている者の辞書には、あつてはならない言葉です。罰は法律上の言葉であり、キリスト教という律法を超えた範囲においては、不要であり意味のない名詞です。も

しどうしてもこの言葉を使うなら、「暗く見える神の恵み」という定義を付けて使うべきです。刑罰という言葉で、あなたに愛される人々をたびたび脅すあなたの教会の聖職者たちに、もう一度あなたの聖書を探求させ、彼らの間違いを正させてください。

しかし、私にはどうしても納得できないことがあります。あの人はなぜ、あんなにも不幸で短命だったのでしょうか。あんなに純粹な心を持ち、あんなに自分を忘れて愛する人のために尽くした人なのに、一日も心安らかな日がなく、生まれてから死ぬまで不幸と苦難が続き、そして、その人自身は激しい苦痛の中で亡くなりました。この理解できない事実には、一体どのような深い意味があるのでしょうか。私はそれを知りたいのです。

聖書には、「地は神を敬う者のために造られた」と書いてあるではありませんか(ヨブ記 15:19)。それなのに、これほど神を慕った人が、この世をほとんど楽しむことなく去りました。ブラジルの砂に埋もれている大きなダイヤモンドは、誰のために造られたのでしょうか。罪のない人々を虐げ、真理を軽蔑する女帝や女王の頭を飾るためでしょうか。あるいは、安楽に貴重な命を浪費し、春は花を愛で、秋は月を眺め、この神聖な「神の仕事場」(God's Task-garden)を単なる遊び場と見なす、怠惰な男女の指や胸元を輝かせるためでしょうか。東台(上野の山)の桜や亀戸の藤は、汚い金のために身を汚し、天使の姿に悪魔の魂を吹き込んだ化物たちだけのものなのでしょうか。誰のために富士山は、毎年荘厳な白い冠を戴くのでしょうか。誰のために富士川の清らかな水は、その麓を流れるのでしょうか。最も清らかで、最も愛すべき人には、朝から晩まで、満月から新月になるまで、その視界は小さな小屋の壁に限定され、聞くことのできるのは、助けを求める苦しむ人々の声だけなのです。ああ、創

造主は、この最も美しく素晴らしい地球を、悪魔とその子どもたちに与えてしまったのでしょうか。

私は、宇宙の隠されたメッセージを理解しました。この美しく素晴らしい世界の創造物は、私たちがそれを得るために作られたのではなく、むしろそれを捨てるために作られたのです。いいえ、もし本当にこれを得たいと願うならば、まずそれを捨てなければなりません（マタイの福音書 16:25）。この世は、まさに試練の場所なのです。私たちが心の底からこの世の全てを捨て去って初めて、私たちの心霊は独立し、この世界も私たちのものとなるのです。死んで生き返り、捨てて得る。キリスト教の「パラドックス（逆説）」とは、このことを言っているのです。私が愛した人は、人生の目的を達成した人でした。彼女の宇宙は小さなものでしたが、その小さな宇宙が彼女を霊の存在へと高め、最大の宇宙へと導く階段となったのです。そうです、神は、神を敬う人々のためにこの地を造られたのです。

私は、もう失ってしまった彼女のことを思うたびに、胸が張り裂けんばかりの後悔に苛まれることがあります。彼女がこの世にいた頃、私は彼女の愛に慣れてしまい、時には不機嫌な態度で彼女の微笑みに報いたり、彼女の真意を理解せず、彼女を苦しめたりしました。ひどい時には、彼女の病中、助けを求められたときでさえ、たとえ数ヶ月の看病で私自身も心身ともに疲れていたとはいえ、荒々しい言葉で応じてしまったことがあります。彼女はいつも穏やかで誠実だったのに、私は何度冷酷で不誠実だったことか。これを思うと、私は地に恥じ、天に恥じ、償うべき彼女はもうおらず、赦しを乞う相手もいません。私はどうすることもできない後悔に苦しみ、まるで無限の地獄の火の中で自分を責め立てているようです。

ある日、私は彼女の墓に行き、塵を払い、花を供え、最も尊い存在に祈りを捧げようとしたとき、細い声が聞こえました。天からの声か、彼女の声かはわかりません。その声は私に語りかけました。「なぜ、愛する者のために泣くのか。お前にはまだ彼女に報いるべき時間と機会がある。彼女がお前に尽くしたのは、お前から見返りを得るためではない。お前が自分自身を省みず、その全身全霊を捧げてお前の神と国に尽くすためなのだ。もし私に報いたいと願うなら、この国、この人々に仕えなさい。家がなく路頭に迷うあの老婦は私なのだ。私に尽くしたいのなら、彼女に尽くせ。貧困に苦しみ、身を汚さざるを得ないあの憐れな少女は私なのだ。私に報いたいなら、彼女を救え。私と同じように早くに両親を亡くし、頼る相手のいない子どもたちは私なのだ。彼女たちを慰めることは、私を慰めることなのだ。お前の悲しみや後悔は無駄だ。早く家に帰り、心を磨き、信仰を深め、愛と善の行いをしなさい。御霊の王国に来る時には、多くの勝利の戦利品をもって、わが主と私を喜ばせてくれ」と。

ああ、何という声でしょうか。かつてパマカスという人が妻を亡くした時、聖ジェロームが彼を慰めるために「他の夫たちは妻の墓をスマイレやバラで飾るが、我がパマカスは妻ポーリナの聖なる遺骨を慈善の香油で潤すべきだ」と手紙を送ったと言います。それはきつと、私が愛する人の墓で心に聞いた声と全く同じものだったので、しょう。そうだ、今日からは以前にも増して世の中の憐れな人々を助けよう。私が愛した人は肉体は失っても、魂は失っていないのだ。私はまだ彼女を看病し、彼女に報いることができる。この国、この人々は私の愛する人のために、私にとってより一層愛すべきものとなったのです。

一人の女性に心を奪われ、残りの人生を無益な悲しみの中で送るのは、人情としては当然かもしれない。しかし、それは本当の勇氣ではありません。キリスト教は、感情を鋭敏にさせるため、深い悲しみを感ぜさせ、その力もまた強くなります。けれども、真理は、鋭敏な感情を鍛え上げ、無限の苦痛の中から無限の勇氣を生み出すものなのです。アナ・ハセルトンの死は、夫である宣教師ジャドソンをますます勇敢で誠実にさせました。メアリー・モファットの死は、探検家リビングストンを、アフリカの奥地へとますます深く進ませました。詩人シリが言うように、

「勇者は独り立つ時最も強い」

という言葉は、きつとこのことを意味しているのでしょう。もし愛の神が存在し、勇者をより一層強くしようとするならば、彼が最も愛するものを奪い取ることに勝る方法はないはずです。

私は愛する人を失ったことで、国も宇宙も、時には神さえも、ほとんど見失いかけてました。しかし、再びそれらを取り戻してみると、国は一層愛おしくなり、宇宙は一層の美と壮大さを加え、神には一層近く感じられるようになりました。愛する人の肉体は失われましたが、彼女の心は私の心と一体になりました。まさか、本当の意味での結びつきは、彼がこの世を去った後にあったとは思いませんでした。

そうだ、私は全てを手に入れ、一つたりとも失っていない。神も存在している。彼も存在している。国も存在している。自然も存在している。すべてのものは、私が彼を失ったからこそ、私にとって新しく作り変えられたのです。

私が得たものはこれだけではありません。私は天国と縁を結び、天国の親戚を得ました。私もいつか、この涙の里を去り、自分の務めを終えて、永遠の眠りにつく時が来るでしょう。その時、私は何も知らない異国へ向かうわけではありません。まるで、かつて彼女がこの世にいた時、彼女に会って一日の苦勞を語り、疲れを忘れようと、仕事の苦勞も辛さも忘れて喜び勇んで家路を急いだように、残されたこの世での戦いも、彼女と再会できる時を楽しみに、立派に戦い抜いた後、心嬉しく旅立っていくだけなのです。